

東京ホームタウン大学院 2021
実践型研究プログラム 実践計画書

タイトル ※必須	「現代版紙芝居おじさん*1」とフィンランドの「ネウボラ*2」をベースとした新宿区内の「公園」における地域包括ケアシステムの活動マニュアルづくり	
キーワード ※必須	<ul style="list-style-type: none"> ・現代版紙芝居おじさん ・ネウボラ ・身近な公園 ・新宿区 ・公民連携(PPP) 	<ul style="list-style-type: none"> ・フレイル予防 ・つながりとたすけあい ・インセンティブ ・ソーシャルキャピタル ・生きる力
代表研究者 氏名・所属 ※必須	氏名 う ち や ま ち な つ 内 山 千 夏	所属 一般社団法人キッカケスクエア

*1 便宜上「おじさん」としてありますが、年齢や性別に特に拘らず、対象を限定した意味では用いておりません。

*2 フィンランド語で「アドバイスの場所」の意。

実践計画をできるだけ分かりやすくご説明ください。 ※必須

最低限、以下の5項目を盛り込んでください。それ以外の内容を記載しても結構です。記載の順番は、番号に従う必要はありません。図表の活用や、別紙での資料添付も可能です。ページ数の制限もありません。

- ① お考えになったきっかけは何ですか？
- ② このプロジェクトでは、どのような地域課題の解決を目指しますか？
- ③ プロジェクトを通じて実現したいことは何ですか？ プロジェクト終了時に、どのような成果物を生み出したいですか？（ゴールイメージ、成果物イメージ）
- ④ どのように、進めていきたいですか？（ゴールまでの道のり、大まかなスケジュール）
- ⑤ 成果物をどのように活用したいですか？誰に届けたいですか？

※別紙参照

「現代版紙芝居おじさん」とフィンランドの「ネウボラ」をベースとした
新宿区内の公園における地域包括ケアシステムの活動マニュアルづくり

どのような地域課題の解決を目指すか？

社会問題の早期発見と深刻化の予防

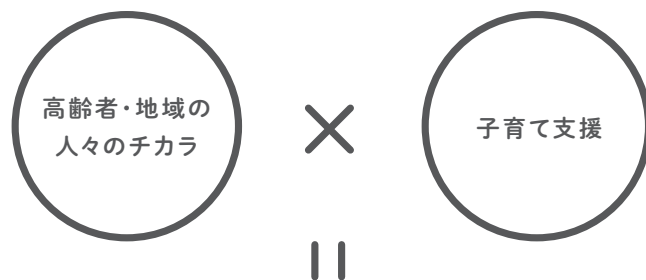
私たちは、数ある社会問題の早期発見と深刻化を防ぐ「仕組みづくり」を行い、地域の人々で自走して行くことが、地域包括ケアシステムの力強い「自発的で持続可能な問題解決力」につながると考え、その方法を模索することにした。

実際、それぞれの地域には、既にたくさんの支援サービスがあるものの、保健師活動の例を挙げると、日本の支援サービスは「ハイリスクアプローチ」に力点がおかれていて、リスク予備軍を早期に発見し、予防的な介入を実施することが難しくなるという³。

では、どのように支援サービスを提供すれば、問題の早期発見、予防、早期支援につなげることができるのだろうか。支援サービス利用までの「物理的」「心理的」ハードルと、支援利用の「継続性」については、「相談窓口がわかりづらい」「手続きが複雑(時間がかかる)」⁴、「見知らぬ人に相談する気にはならない」⁵といったハードルがあり、母子保健事業を例に挙げると「単発のサービス提供」に終わっていて、担当保健師に気軽に相談できる顔の見える関係づくりができていないことが多い⁶という。

そこで、私たちは、既存の支援サービスを活かしつつ、「物理的」「心理的」ハードルを下げ、サービスまでの到達と「継続性」を保つ仕組みづくりの「場」として、「身近な公園」での事業を考えた。公園を「ハブ」とし、「高齢者・地域の人々のチカラ」を活用して「子育て支援」とつなぐことで、事業提供側の自己有用感の高まりやフレイル予防にもつながり、「社会問題が顕在化する手前の状態」にアクセスしやすくなることで、問題の早期発見と深刻化を防ぎ、必要があれば既存の支援サービスへつなぐ仕組みづくりを考えたい。

このプロジェクトでは、文献などを用いた「実態把握」と、そこから導き出された「仮説」を検証し、ヒアリングやアンケート調査などを行い、活動マニュアルのベース作りまで行うことを目的としている。各地域のニーズに合った活動として利用できるよう、しっかりとしたベースと、柔軟性・汎用性のあるマニュアル作りを行い、地域課題の解決への一歩を踏み出したい。



各々が抱える課題・問題の深刻化の予防と解決

ポイントは「身近な公園」



事業例のイメージ(新宿区内の公園にて)

01

現代版紙芝居おじさん事業

「食」「あそび」「文庫・よみきかせ」「みまもり」など



<自己有用感>

人の役に立てて嬉しい。

<健康増進・フレイル予防>

公園まで来ることで、体力的にも心理的にも健康に努めることができる。

<雇用>

微々たるものでも、収入があって嬉しい。

<食>

公園から子どもがなかなか帰りたがらないから、1品買って帰ることにして、遊びをじっくり見守ろうかな。

<あそび>

近くにおじいちゃんおばあちゃんがいないので、知らない伝承遊びを教えてもらって子どもも嬉しそう。

<文庫・よみきかせ>

泥だらけのまま公園帰りに図書館には立ち寄れないので、公園に遊びに来たついでに本に触れられてありがたい。

<みまもり>

小学生になったばかりで、一人で遊びに行かせるときに、知っている地域の人がいると安心だし、きょうだいをちょっとトイレに連れて行く時、下の子を見てもらえてありがたい。



02

つながり・たすけあい事業

公園を「ハブ」とした「スキルを活かした支援」など

例: 子どもなどの服の修繕事業



<「時間がない」を解決>

ちょっとした修繕でも、子育てをしながらだと大変なので助かる。



<自己有用感>

自分のできることで人の役に立てて嬉しい。

<健康増進・フレイル予防>

公園まで来ることで、体力的にも心理的にも健康に努めることができる。

<自分の気持ちもたいせつに>

人の役に立ちたいが、人との交流は苦手なので、自分のできることで物を介して人の役に立てることが嬉しい。



補足事項



**事業内容はよくあるものだが、
場所が「身近な公園」というところがポイント。**

身近で、住んでいる場所問わずアクセスがしやすい

- ・ 新宿区立の公園だけでも102ある。(利用したい人の生活圏にあることが予想されるので日常利用が可能になる可能性がある、活動したい人の活動場所・雇用場所の可能性も広がる。)
- ・ 高齢者や幼い子どもなど、長距離移動が難しい人にとって特に移動距離が短いことや、生活圏にあることは、アクセスのしやすさ、継続利用の可能性、安心感などにつながる。

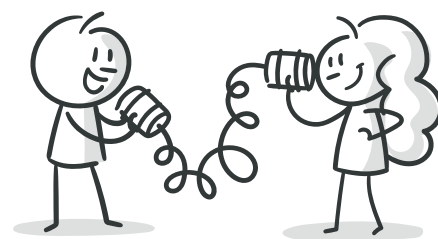
開放的で逃げ場もあり、自分のタイミングで関わりやすい

- ・ 人と関わるのにハードルが高い人や相談までにハードルが高い人にも逃げ場があることで、自分のタイミングで関わるのが可能になる。(自分の意思の尊重は支援の継続性につながる。)
- ・ 室内だったり、ある程度目的を持って集まったりすることに抵抗のある人でも、一步を踏み出しやすい。

運営のコスト問題の解消と地域の人々による持続可能な運営の可能性

- ・ ソーシャルビジネスとなると、運営のための資金が課題となることが多いが、公園の使用料であれば家賃などの固定費と異なりコストが抑えられ、また、新宿区では公民連携(PPP)を推めている様子が見られるので、交渉の余地があると考えられる。
- ・ 今、個々が支払っているものから収益を得ることを考慮するのが1番の近道と考え、「食べること」に関する事業を行うことは、ニーズにも合い、運営のための資金獲得の可能性にもつながる。(ただし、個々の地域で管理までは大変なので、「区」または「地区」単位で、セントラルキッチンや商品管理のような場を設けるなどを考える必要がある。)

上記の理由から、「物理的(時間・空間)」、「心理的」にアクセスしやすい環境を用意することで、信頼関係の築きやすさ・相談のしやすさ・相談者の変化への気づきやすさを実現、問題の早期発見・予防を可能とし、必要に応じて公的サービスなどの情報提供・連携も行い、地域の人々の小さな力のあつまりで社会問題の深刻化を防ぐことができるのではないかとという仮定の検証を、新宿区内の公園でできればと考えている。

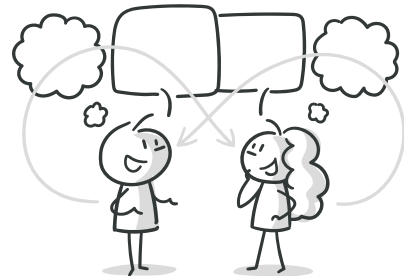


成果物をどのように活用したいか？

新宿区内の公園における活動マニュアルの基礎づくりに役立て、持続可能な活動にするための検証と実践を続け、ゆくゆくは他区でも活用できるようまとめたいと考えている。

調査に利用したい文献の一例

- ・『高齢者の生活実態 平成27年度 東京都福祉保険基礎調査報告書』
- ・『東京の子供と家庭 平成29年度 東京都福祉保険基礎調査報告書』
- ・『令和2年3月 東京都子供・子育て支援総合計画(第2期)』
- ・『2020 社会福祉の手引』
- ・『フィンランドのネウボラに学ぶ 母子保健のメソッド』
- ・『研究所レポート2018 No.2 公民連携(PPP)の研究(1)―公民連携(PPP)の推進に向けて―』
- ・『研究所レポート2019 No.2 公民連携(PPP)の研究(2)―事例研究と新宿区での実現に向けて―』
- ・『新宿区子ども・子育て支援事業計画(第二期) 令和2(2020)年度～令和6(2024)年度(素案)に関する「パブリック・コメントの意見要旨と区の考え方」「地域説明会における意見・質問要旨と回答要旨』』



このプロジェクトをかんがえたきっかけ

私は20代の頃、イギリスで有償ボランティアとして、「レスパイトケア」という乳幼児や障害児・者、高齢者などを在宅でケアしている家族に休息や時間を与えるため、一時的にケアを代替するサービスに従事したことがあります。サービスを受ける側が普段と変わらない生活を送ることができるように、各家庭の生活に関することを細かく理解した上で提供するサービスだったため、ヒアリングの際の細かなニュアンスにも気を配り、小さな安心の積み重ねを心掛け、介護者(家族)にとっても利用者にとっても安らげるよう努めておりました。

個人的には、14の異なる家庭を担当し、各家庭の生活スタイル、価値観などを経験することによって、「それぞれのニーズに合ったサービスの提供」について深く考える機会となり、それまで、サービスはもっと画一的なものでなければ提供と継続は難しいのではないだろうか、運営側としては煩雑すぎないだろうか、と感じていたにもかかわらず、利用者からの感謝の言葉、運営者の熱心な指導、看護師や学校の先生など、他職種との連携に触れたことで、住み慣れた「地域」の中で、今までと変わらない暮らしができることのしあわせなどを見ることができ、子どもから高齢者まで、幅広い年齢に対する「地域包括ケアシステム」の可能性について考えるきっかけとなったと感じております。

参考：

- *3 『フィンランドのネウボラに学ぶ 母子保健のメソッド』 P.16
- *4 『高齢者の生活実態 平成27年度 東京都福祉保険基礎調査報告書』 P.230
- *5 『令和2年3月 東京都子供・子育て支援総合計画(第2期)』 P.104
- *6 『フィンランドのネウボラに学ぶ 母子保健のメソッド』 P.16

おおまかなスケジュール

